

## 図書館マイスター認定スタンプラリー ブック・アピール・コンテスト 表彰者決定

図書館情報センターでは多年にわたり「図書館マイスター認定スタンプラリー」「ブック・アピール・コンテスト」を主催しています。今年度も表彰対象者が決定しましたので、皆さんにご紹介します。

### 第8回 図書館マイスター認定スタンプラリー

図書館情報センターが主催する「図書館マイスター認定スタンプラリー」を、今年度も4月5日より6月30日の期間「日進キャンパス図書館情報センター」「名城公園キャンパス図書館分館」を対象に開催しました。

多数の参加者があり、図書館に関する知識、図書館主催の講習会参加、貸出冊数などによりポイントを重ね、その中より規程のポイントに達した参加者に対し賞状、記念品を授与しました。なお、参加1年目はブロンズ・マイスターを授与し、ブロンズ・マイスター受賞者が2年目にチャレンジするとシルバー・マイスター、3年目ゴールド・マイスター、4年目スーパー・マイスターと順次呼び方を変えて授与しています。今年度の受賞者は次の方々です。

**ゴールド・マイスター** 法学部:山中琴友季さん 経済学部:本多弘樹さん

**シルバー・マイスター** 商学部:上野滉平さん

**ブロンズ・マイスター** 文学部:早川紘布さん 商学部:吉積勇希さん 伊藤里奈さん 中嶋愛由美さん  
吉本貴さん 経営学部:山下稜平さん 伊藤広樹さん 経済学部:田中拓徒さん

(順序不同)



受賞式参加の皆さん(左写真中央は二宮図書館長)

**編集後記:** まもなく秋学期の試験月である1月を迎えます。開館日数は平均して20日前後と、他の月と比較し必ずしも多くはないのですが、毎年1日平均1,000名を超える入館者があります。ラーニング・コモンズなど場所によっては非常に混雑します。1人でも多くの学生が勉強できるように、机、椅子などに荷物を置かず、譲り合ってご利用ください。(事務長・大平)

# ブック・アピール・コンテスト

図書館情報センターが主催し、今回で第7回目を迎えたブック・アピール・コンテストが9月1日から10月1日を応募期間として開催されました。29名と過去最大の応募者があり、それぞれが、自分自身で選んだ書籍の魅力のアピールするために、規程の枚数を溢れんばかりに推薦する作品が、多数寄せられました。11月下旬に開催された選考委員会により最優秀賞1名、優秀賞2名、佳作3名が決定しました。日進キャンパスにては佐藤学長より、名城公園キャンパスにては後藤副学長より、賞状並び記念品が対象学生に渡されました。

今年度の受賞者は次の方々です。入賞作品の書籍は図書館情報センター・名城公園キャンパス分館に展示し、貸出も可能です。

## 最優秀賞

心身科学部 中村祐月さん 「アルジャーノンに花束を[新版]:ぼくわりこうになりたいと願った少年の物語」

## 優秀賞

文学部 増田優菜さん 「恋文の技術:全ての恋する人と恋したい人へ」

経営学研究科 中林大貴さん

「銀河鉄道の父:第158回直木賞受賞作品!稀代の童話作家はろくでなし息子だったのか?」

## 佳作

文学部 熊田由佳里さん

「メイクが喜びに変わる答え:化粧で悩んでるあなた!その時間、もったいないですよ!」

経済学部 山田柊太さん

「最後の医者桜を見上げて君を想う:もしあなたが病気になったとき、あなたはどのように闘いますか?」

経営学部 天春祐輔さん「クローバー・レイン:晴れる雨」

受賞者の学部(研究科)・氏名・書名・キャッチコピーの順に記載

## 最優秀賞受賞作品

不朽の名作である。ダニエル・キイスがこの作品を発表した1966年以降、欧米を中心にこの物語は映画化、ドラマ化を繰り返し、日本でもこの物語を題材としたテレビドラマは二度作られている。年代を問わず、読書好きならば一度は名前を聞いたり、手にしたことのある一冊である。いったいこの物語のどのような要素が、それほど世界中の人々を惹きつけるのだろうか。

物語の主人公はチャーリー・ゴードン。この物語は彼の手記として語られる。彼は32歳の心優しい青年であるが、その知能は幼い子どものレベルである。この物語は、彼が、大学の研究機関によって知能を増進する手術を受け、その経過を記していくものだ。やがて彼の知能は天才の域にまで達し、これまでの知能レベルでは見ることのできなかつた世界を前に苦悩することになる。特筆すべきは、作者ダニエル・キイスの想像力であろう。幼児のレベルの文章が、一人の青年のレベルに、さらに天才のレベルへと達していく。周囲に笑われてきた青年の、表情が引き締まり、知識人をも超えていく姿が、ただ「チャーリーの手記」から伝わってくるのだ。

この物語のタイトルに登場する「アルジャーノン」という名前は、同じく知能増進の手術を受けた、白いネズミの名である。「アルジャーノンに花束を」という題こそ、この物語の真のキャッチコピーだということには、読後にしか気づけない。この題は、ただ淡々と、チャーリーという青年の無垢なまでの優しさを表現していたのだ。そして読者は、そのことを、チャーリーの生涯を知り、彼の手記の最後の一文まで読み終えたときに知る。そしてその瞬間に、胸が詰まるような感動がもたらされる。

チャーリー・ゴードンは一人の男でありながら、知的な遅れを持つ人間の世界と、すべての事象を俯瞰する天才の世界、その両方を知る。そして彼の視点を通じ、読者もまた、チャーリーの世界を疑似体験する。我々読者は、己の人生を振り返り、また未来を案じるチャーリーの苦悩から、さまざまな立場の人間の視点に立ち、共感して生きていくことの大切さを学ぶ。

物語の収束については、何も知らぬまま読んでほしいと思う。哲学的な視点を持ったチャーリーは、人生の救いや、その意義について、過去、現在、未来に思いを馳せながら体感する。そして、その結末を、「アルジャーノンに花束を」というタイトルが暗示しているのである。

誰かと語らいたくなる一冊である。